

# とりたて詞ダケにおける とりたてのフォーカスと談話のフォーカス<sup>1</sup>

井戸 美里

## 要 旨

本稿の目的は、とりたて詞ダケが談話のフォーカスとは直接関わりを持たないことを指摘することである。先行研究では、Rooth(1985)に倣い、とりたて詞と談話のフォーカスを積極的に結びつけようとするものが多い。しかし、いずれも、とりたて詞一般についての議論であったり、その統語的位置を加味しない議論であるという問題点がある。本稿は、項位置のダケについて、分裂文の前提部分に現れるか、否定より狭いスコープをとるか、介在効果が現れるかというテストを通して、ダケが談話のフォーカスを担わないことを示す。また、一見、ダケが談話のフォーカスを担うと思われる現象は、主語位置と目的語位置の非対称性によるものであることを指摘する。ただし、「断定限定」のダケについては、項位置のダケとは並行に扱 ことも同時に指摘する。

## キーワード

とりたて詞 フォーカス ダケ 分裂文 否定のスコープ 介在効果

## 1 はじめに

とりたて詞ダケは、英語の焦点副詞にあたる要素として、Rooth(1985)の分析に基づき、談話のフォーカスと密接な関わりを持つものとして分析されることが多い(青柳 2006、上山 2007、Tomioka 2007、小林 2009 等)。しかし、そのような先行研究でもすでに指摘されているように、ダケは必ずしも談話のフォーカスを担うとは限らない。それは、(1)のように、ダケが分裂文の前提部分(旧情報部分)に出現可能であることから分かる。

- (1) a. 太郎は、リンゴダケを 食べた。
- b. [リンゴダケを 食べたの]-は、太郎だ。

しかし、全てのとりたて詞が分裂文の前提部分に出現可能なわけではない。また、全てのダケが同じ許容度で分裂文の前提部分に出現可能なわけでもない。(2)の対比のハヤ(3)の「断定限定」(久野・モネーン 1992)のデダケが分裂文の前提部分に現れると許容度が落

---

<sup>1</sup> 本研究は、JSPS 科研費 14J01189 の助成を受けたものである。

ちる。

(2)??[教室で リンゴを 食べたの]-は、太郎だ。

(3)??[注射でダケ投与できるの]-は、インスリンだ。

よって、とりたて詞一般をそのまま談話のフォーカスに結び付けて論じるのは性急であり、個別のとりたて詞の議論、また、1つのとりたて詞の中でも、それが用いられる統語的位置を加味したうえで、とりたて詞と談話のフォーカスの関係を論じる必要があると思われる。本稿は、対象をダケに絞り、ダケは談話のフォーカスとは直接関わりを持たない要素であることを指摘する。ただし、話者によって揺れはあるものの、いわゆる「断定限定」のダケには、談話のフォーカスが関わるとと思われる現象が見られ、区別して扱うべきことを指摘する。

本稿の構成は以下の通りである。まず、2節では、談話のフォーカスととりたてのフォーカスがそれぞれどのようなものかを概観し、先行研究の問題点を指摘する。3節では談話のフォーカスが関わる具体的な現象の観察(分裂文テスト、否定のスコープテスト、介入効果テスト)を試み、ダケが談話のフォーカスと直接関わりを持たないことを示す。また、一方で「断定限定」のデダケはこの限りでないことも示す。最後に4節では、まとめと今後の展望を述べる。

## 2 先行研究

フォーカス(新情報)とは、話者の既有知識をアップデートする要素のことである。フォーカス以外の要素は、前提(旧情報)に当たる。Valluduí(1992)や、Heycock(2008)によると、文は必ずフォーカスを含む。したがって、前提を含まない文(文全体がフォーカスである文)は可能であるが、フォーカスを含まない文は存在しないことになる。フォーカスの例としては、(4)(5)に見るような、強勢が置かれた要素や、総記のガが付加した要素等が挙げられる。

(4) ジョンが 学生だ。 (総記のガ)

(5) 太郎が リンゴを 食べた。 (強勢)

本稿では、このような文の新情報を表すフォーカスを、とりたてのフォーカスと区別するために「談話のフォーカス」と呼んでおくこととする。

Rooth(1985, 1997)は、英語の *only* の解釈には、談話のフォーカスが必要であることを述べている。例えば、ジョンがビルとトムの二人をスーに紹介した場面において、(6a)は偽になるが、(6b)は真になるとしている。Fはフォーカスが置かれる要素を指している。

- (6) a. John only introduced [Bill]<sub>F</sub> to Sue.  
b. John only introduced Bill to [Sue]<sub>F</sub>. (Rooth 1997)

(6a)は直接目的語の位置にフォーカスが置かれている。すると、only は ‘John introduced x to Sue’ という代替集合を形成し、x に当てはまる要素が Bill のときのみ文が真になることを示す。よって、(6a)のみが偽になるという真偽値の違いが生じると Rooth は分析する。

一方、日本語のとりたて詞の分析においては、沼田(2000, 2009)がとりたてのフォーカスを次のように定義している。沼田(2000, 2009)では、とりたて詞を、「自者」と、それに範列的に対立する要素「他者」の論理的関係を表す要素であるとし、とりたてのフォーカスとは、「とりたて詞がとりたてる自者である」(沼田 2000: 164)と述べている<sup>2</sup>。つまり、とりたてのフォーカスとは、Rooth の分析における、「代替集合を形成する x が、文中のどの要素に値するか」ということにほぼ相当する。Rooth はこれを、談話のフォーカスによって決定するとしているが、沼田(2009)では、「とりたてのフォーカスは文脈など語用論的要因で決定される」(沼田 2000: 164)とし、談話のフォーカスとの関連については触れていない。

さて、理論的な分析においては、日本語においても、Rooth の分析に従ってとりたて詞を談話のフォーカスを導入する要素だとする分析は多い(青柳 2006、上山 2007、Tomioka 2007、小林 2009 等)。しかし、そのような先行研究においても、すでにいくつかの指摘があるように、日本語のとりたて詞にしる、英語の焦点副詞にしる、これらは談話のフォーカスを担わない位置で用いることが可能である。Valluduví(1990)は、英語の only が、(7)のように、分裂文の前提部分(旧情報部分)に出現可能である例を挙げ、only の解釈を決定するのにフォーカスが必須ではないことを指摘している。

- (7) It's JOHN who only eats rice. (Valluduví 1990: 149)

また、日本語のとりたて詞の理論的研究においても、小林(2009)が、とりたて詞が必ずしも談話のフォーカスを担わない場合があることを指摘している。小林(2009)は、とりたて詞が[New information(NI)]素性という解釈可能素性を持つと仮定する。一方、文は[uF]素性という解釈不可能素性を持つ。これは、文に必須の要素である談話のフォーカスを探索する素性である。この[uF]素性がとりたて詞の[NI]素性と一致した場合、とりたて詞は[Newest information]素性を持ち、とりたてのフォーカス＝談話のフォーカスとなる。しかし、この一致は必須ではなく、文中の他の要素が[uF]素性と一致した場合は、とりたて詞は談話のフォーカスを担う必要はない。つまり、とりたて詞が談話のフォーカスにならない場合が

<sup>2</sup>沼田(2000, 2009)では、フォーカスの種類として直前フォーカス、後方移動フォーカス、前方移動フォーカスを挙げているが、本発表では、直前フォーカスのみを扱う。

あるということになる。

しかし、小林(2009)は、ハとモに関する分析を他のとりたて詞にも拡張しているという問題点がある。ハとモに関する分析が、ダケの分析にも当てはまるとは限らないことは 1 節で見た通りである。また、とりたて詞の統語的位置についても区別しないままに議論しているという問題点もある。小林(2009)の分析では、[uF]素性が探索可能な領域であれば、とりたて詞の統語的位置は加味されない。しかし、1 節で見たように、項の位置に現れたダケと、「断定限定」を表すデダケは必ずしも同じ振る舞いを見せるわけではなく、区別して扱うべきである。本稿では、特に項位置のダケは談話のフォーカスと直接は関わりを持たない一方、付加詞に後接した「断定限定」のダケは談話のフォーカスが関わっていると思われる現象が見られることを示す。

### 3 現象の観察

#### 3.1 観察の道具立て

本稿では、ダケにおける談話のフォーカスととりたてのフォーカスの関わりを分析するため、項位置(目的語、主語)のダケと付加詞に後接する位置のダケ(「断定限定」のダケ)の両者に、先行研究で指摘されている以下の 3 つのテストを試みる。

一つ目のテストは、(1)でも示した分裂文テストである。分裂文は、前項が前提部分になるため、その位置に談話のフォーカスは現れることができない。つまり、ダケが談話のフォーカスを要求するのであれば、分裂文の前提部分には現れ得ないことを予測する。

二つ目のテストは、否定のスコープテストである。小林(2009)では、「フォーカス句は最も広いスコープをとる」として、「最新情報[*Newest Information*]」(本稿でいう談話のフォーカス)が、否定することができない要素であるとしている。この仮説に基づくと、ダケが談話のフォーカスを要求するのであれば、否定より必ず広いスコープをとることを予測することになる<sup>3</sup>。

最後に三つ目のテストは、Hoji(1985)、Tomioka(2007)が提示する介在効果を用いたテストである。Hoji(1985)は、Wh 句と量子子が共起し、表層的に量子子が Wh 句を c 統御している場合、介在効果が生まれることを指摘している<sup>4</sup>。

- (8) a. ??誰かが 何を 飲みましたか?  
 b. 何を 誰かが 飲みましたか? Hoji(1985: 264)

<sup>3</sup>小林(2009)は、対比のハが肯定文においては VP 内におさまることができない一方、否定文においては VP 内に収まることができるという観察をもとに、対比のハに否定極性を設定し、意味を整理している。その結果、一見対比のハが否定より狭いスコープをとっているように見える例は、対比のハの否定極性の表れであり、対比のハが常に最大スコープをとると分析する。

<sup>4</sup>本稿では、介在効果の許容度についてこれ以上踏み込まないが、話者によって判定に揺れがあり、特に量子子が「誰モガ」のような全称を表す要素の場合、許容度が上がる母語話者がいるようである。また、Tomioka(2007)が指摘しているように、音韻的な特徴も影響を与える現象である。

- (9) a. [s 誰かが [vp 何を 飲みました]]か<sub>Q</sub>  
 b. [s 何を<sub>i</sub> [s 誰かが [vp t<sub>i</sub> 飲みました]]]か<sub>Q</sub>

このような Wh 疑問文における介在効果は、本質的には数量詞ではなく談話のフォーカスが関わる要素が起こすものであるとされる(Kim 2002、Tomioka2007)。つまり、ダケがフォーカスを担う要素である場合は、この介在効果が現れることが考えられる。ダケの介在効果については、Tomioka(2007)にすでに指摘があるため、次節以降で詳しく見ていく。

### 3.2 項位置のダケ

まず、項位置のダケについて観察する。初めに、分裂文について見ていく。(1)にも示したように、目的語位置のダケは分裂文の前項部分に出現可能である。

- (10) [リンゴダケを 食べたの]-は、太郎だ。  
 (11) [必要最低限のものダケを 買ったの]-は、太郎だ。

ダケの解釈に談話のフォーカスが必須であるならば、前提しか出現できない分裂文の前項にはダケは現れないという予測になるはずである。よって、(10)(11)の現象は、ダケの解釈には、必ずしも談話のフォーカスは必須ではないということを示していることになる。

次に、否定のスコープについて観察する。目的語位置のダケは、否定とのスコープ関係が曖昧である。

- (12) a. 太郎は リンゴダケを 食べなかった。(他の果物は食べたのに。)  
 (ダケ > ない)  
 b. 太郎は リンゴダケを 食べなかった。(他の果物もいろいろ食べた。)  
 (ない > ダケ)  
 (13) a. 太郎は、一方の話ダケを聞かなかった。(片方の話ばかり聞いた。)  
 (ダケ > ない)  
 b. 太郎は、一方の話ダケを聞かなかった。(ちゃんと両方の話を聞いた。)  
 (ない > ダケ)<sup>5</sup>

(12a)(13a)は、ダケが否定より広いスコープをとっている例である。一方、(12b)(13b)は、ダケが否定より狭いスコープをとっている例である。(12)(13)のダケは、いずれの解釈も同様に可能であり、ダケは否定より広いスコープをとるとは限らないことが分かる。小林(2009)の仮説に基づけば、談話のフォーカスを担う要素は否定され得ないため、ダケが否

<sup>5</sup> ダケと否定のスコープは、「片方」「一方」のような二者の対立があるものにダケを付加した場合に解釈しやすい。このことを指摘してくださったのは沼田善子先生である。

定より狭いスコープをとれることは、ダケが必ずしも談話のフォーカスを担わないことを示していることになる。

最後に、介在効果テストについて、Tomioka(2007)の観察を見ていく。Tomioka(2007)は、与格間接目的語にモやダケが付加した場合、介在効果が生まれないことを指摘している。(14)は、与格間接目的語のダケやモが表層レベルで Wh 句を c 統御しているため、介在効果が生まれるように思われるが、実際には、この位置にダケやモが現れても介在効果は出現しない。

(14) ケンは エリカにモ/ダケ 何を 見せたの? (Tomioka2007: 106)

すなわち、Tomioka(2007)の観察は(間接)目的語に付加したダケは、談話のフォーカスとは関わらないということを示していると捉えることができる。

ここまで、(間接)目的語の位置に現れるダケについて、いずれの場合も談話のフォーカスを担っていないと考えられる現象が見られることを確認した。では、主語位置のダケの場合はどうだろうか。主語位置のダケについても、同様に3つのテストを試みると、分裂文テスト以外のテストにおいては、談話のフォーカスを担っていると思われる現象が見られる。

まずは、主語位置のダケが分裂文の前提部分に現れるかについて見る。すると(15)(16)から分かるように主語位置のダケも目的語位置のダケと同様に分裂文の前提部分に出現可能である。

(15) [太郎ダケが 食べたの]-は、リンゴだ。

(16) [太郎ダケが パーティに誘ったの]-は、花子だ。

一方で、否定のスコープテストに関しては、主語位置のダケは、目的語位置より「ダケ > ない」の解釈が優勢になり、目的語位置のように「ダケ > ない」と「ない > ダケ」の曖昧性が生じにくくなる。

(17) a. 太郎ダケが リンゴを 食べなかった。(他の人はリンゴを食べた。)  
(ダケ > ない)

b. ??太郎ダケが リンゴを 食べなかった。(他の人もリンゴを食べた。)  
(ない > ダケ)

(18) a. 双子の兄ダケが おやつを 食べなかった。(弟はおやつを食べた。)  
(ダケ > ない)

b. ??双子の兄ダケが おやつを 食べなかった。(二人ともおやつを食べた。)  
(ない > ダケ)

さらに、介在効果テストについて、Tomioka(2007)の観察を見る。Tomioka(2007)は、間接目的語位置に現れた(14)とは異なり、主語にフォーカスが関わる要素が現れたときは、介在効果が現れることを指摘し、(19)を挙げている。

- (19) a. ???健ダケが／???健も 何を読んだの？ (Tomioka2007: 98)  
 b. 何を 健ダケが／健も 読んだの？

すなわち、Tomioka(2007)の観察は、ガが付加したダケにのみ、談話のフォーカスとしての機能があり、(間接)目的語に付加したダケは、談話のフォーカスとは関わらないということを示していると捉えることができる。

ここまでの観察をまとめると次の表 1 のようになる。

表 1 目的語位置、主語位置のダケと談話のスコープに関するテスト

|            | 分裂文の前提部分に出<br>現不可能か | 必ず否定より広いスコ<br>ープをとるか | 介在効果が現れるか |
|------------|---------------------|----------------------|-----------|
| 目的語に付加したダケ | ×                   | ×                    | ×         |
| 主語に付加したダケ  | ×                   | ○                    | ○         |

表 1 から分かるように、ダケの談話のフォーカスとの関わり方には、目的語位置と主語位置で非対称性が見られる。つまり、ダケが談話のフォーカスを担うか否かは、ダケ自体の性質ではなく、主語と目的語の非対称性によって左右されると捉えることができる。目的語の場合は否定とのスコープ関係が曖昧になる一方、主語の場合は否定が狭いスコープが優勢になるという現象は、ダケ以外の例でも観察される(Miyagawa 2010)。

- (20) a. 太郎が 全員を 叱らなかった。(ない>全員、全員>ない)  
 (Miyagawa 2010: 74)  
 b. 全員が 試験を 受けなかった>(\*ない>全員、全員>ない)  
 (Miyagawa 2010: 75)

つまり、主語位置に現れたダケが談話のフォーカスを担うように見えるのは、ダケの性質というよりはむしろ、主語の性質とみることができる。

また、主語に付加した場合のダケの例文判定について、否定のスコープテストにしる、介在効果にしる、話者によって判定に揺れがあるようである<sup>6</sup>。筆者の調査によると、話者によっては(17b)(18b)(19a)を許容する話者がおり、一様に非文の判定がなされるわけではな

<sup>6</sup> ダケの介在効果の判定については、Tomioka(2015)が Tomioka(2007)の判定を修正し、ダケには介在効果が見られないとしている。

い。しかし、(17b)(18b)を許容する話者は、(19a)と(19b)の違いも認めない傾向にあり、単に例文判定が揺れる現象ではなく、それぞれに相関性が見られる現象であるようである。ただし、そのような話者であっても、(17b)(18b)よりは(17a)(18a)の解釈の方が優勢のようであり、介在効果の判定も、比較的には、(19b)を好む傾向があるようである。また、予測としては、そのような話者は、(20b)の「ない>全員」の解釈も可能と判断すると考えられる。

最後に、気を付けなくてはならないのは、表 1 にまとめた現象は、主節現象である点である。主語と目的語の談話のフォーカスに関する非対称性は、埋め込み節では中和される。否定のスコープテストにせよ、介在効果テストにせよ、埋め込み節ではいずれも正文になる。

- (21) 太郎は、[双子の兄ダケが おやつを 食べない]ように、見張っていた。  
 (ちゃんと二人ともおやつが食べられるように、見張っていた。) (ない>ダケ)
- (22) 君は[CP ケンモ/ケンダケが 何を読んだと]思っているの？

(Tomioka 2007: 106)

(21)は、「ちゃんと二人ともおやつを食べるように見張っていた」という意味で解釈可能であり、それは主節の(18b)では困難だった「ない>ダケ」の解釈である。(22)は、主語位置のモヤダケが Wh 句「何を」を表層レベルで c 統御している例であるが、(18a)に比べて許容度が高い。このように、従属節ではまた異なった振る舞いが見られる<sup>7</sup>。

以上、本節では、とりたてて詞ダケが談話のフォーカスとは直接かかわらないことを論じた。また、主語位置で、一見ダケが談話のフォーカスを担っているように見える現象は、主語と目的語の非対称性によって説明できることも見た。さらに、その現象が主節現象であることを付け加えた。

### 3.3 「断定限定」のダケデ

前接では、ダケが直接談話のフォーカスと関わるわけではないことを指摘した。では、全てのダケが談話のフォーカスとは関係がないのであろうか。ダケは、付加詞に前接するか後接するかで意味解釈が異なることが指摘されている(森田 1972、奥津 1985、沼田 1991、2009、久野・モネーン 1992 等)<sup>8</sup>。

- (23) 注射ダケで 治る。 (必要最低限：久野・モネーン 1992: 157)

<sup>7</sup> 従属節における否定ととりたてて詞のスコープに関しては、小林(2009)、田川他(2011)を参照。

<sup>8</sup> 本稿では便宜上「付加詞に後接する位置」とするが、デダケのデが果たして付加詞かどうかについては議論があるところである(奥津 1985、沼田 1991、沼田 2009)。また、デほどはっきりしないものの、デ以外の付加詞でも同様の現象が見られる(久野・モネーン 1992)。

(24) 注射でダケ 治る。 (断定限定：久野・モネーン 1992: 157)

(23)は、「(この病気を治すためには、)注射があれば十分であり、他の手段はなくても良い」ということを示している一方、(24)は、「(この病気を治すためには、)注射を使うしかなく、他の手段では治らない」ということを示している<sup>9</sup>。久野・モネーン(1992)に倣い、前者の解釈を「必要最低限」、後者の解釈を「断定限定」と呼ぶことにしておく。

久野・モネーン(1992)は、「必要最低限」の解釈の場合は、ダケデが動詞句修飾を行っている一方、「断定限定」の解釈の場合は、デダケが文修飾を行っているという違いがあるとす。また、沼田(1991, 2009)では、デが「疑似節」を形成し、文全体を作用域にとると指摘している。

(25) a. (<バス>だけで)、行ける。

b. (<バスで>だけ、行ける)。

(<>はとりたてのフォーカス、()は作用域を表す) (沼田 2009: 199)

本節で観察するのは、文全体を作用域にとる特徴を持つ「断定限定」のダケである。本節では、「断定限定」のデダケは、項位置のダケとは異なり、談話のフォーカスを担うと考えられる現象が見られ、両者は区別して扱うべきことを指摘する。

まずは、分裂文テストを試みる。すると、(26)(27)から、「断定限定」のダケの場合は、分裂文の前提部分に現れると許容度が下がることが分かる<sup>10</sup>。

(26) a. インスリンは注射でダケ投与できる。(他の手段では投与できない。)

b. ?[注射でダケ投与できるの]-は、インスリンだ。

(27) a. 太郎は、リンゴを右手でダケ握りつぶせる。(左手では握りつぶせない。)

b. ?[太郎が右手でダケ握りつぶせるの]-は、リンゴだ。

(26b)(27b)の文の不自然さは、次の「必要最低限」のダケデの文や、シカの文が不自由なく許容されるのと比較するとより分かりやすい。

(28) [注射ダケで治るの]-は、この病気だ。

(29) [注射でシカ投与できないの]-は、インスリンだ。

<sup>9</sup>正確には、ダケデにも断定限定の解釈が可能だが(沼田 2009 他)、解釈は最低条件のほうが優位であり、ここではひとまず保留にしておく。

<sup>10</sup> 分裂文テストと、続く介在効果テストにおいて、デダケの許容度が高い話者もいるようである。デに関しては、格助詞とするか否か議論があるところであり(注 9 参照)、そのような許容度の高い話者は、デダケの特殊性がなく、単純な格助詞として解釈している可能性がある。この点を指摘してくださったのは、沼田善子先生である。

以上のように、「断定限定」のデダケは、項位置のダケとは統語的性質が異なり、分裂文の前提部分に出現不可能であることが分かる。

次に、否定のスコープテストを試みる。すると、(30)(31)から分かるように、「断定限定」のデダケは、必ず否定より広いスコープをとることが分かる。

- (30) a. この病気は、この薬でダケ、治らなかった(他の薬では治った)。(ダケ>ない)  
b. \*この病気は、この薬でダケ、治らなかった。(他の薬でも治った)。(ない>ダケ)
- (31) a. 太郎は、リンゴを 右手でダケ 握りつぶせなかった。  
(左手では握りつぶせた。)(ダケ>ない)  
b. \*太郎は、リンゴを 右手でダケ 握りつぶせなかった。  
(左手でも握りつぶせた。)(ない>ダケ)

(30a)(31a)は、ダケが否定より広いスコープをとる解釈であり、(30b)(31b)はダケが否定より狭いスコープをとる解釈である。(30a)(31a)の解釈は問題なく許容される一方、(30b)(31b)の解釈は困難である。(30b)(31b)の解釈は、「太郎はリンゴを右手でダケ握りつぶせる(という)わけではなかった。(左手でも、右手でも握りつぶせた。)」のように、間に「わけ」のような形式名詞を挟んで解釈しなければ得られない。つまり、否定のスコープテストにおいても、断定限定のデダケは、常に否定より広いスコープをとる解釈になる。ここでも、項位置のダケとは異なる結果が得られる。

最後に、介在効果テストを試みる。

- (32) a. ?どの薬が、注射でダケ 投与できるの?  
b. ??注射でダケ、どの薬が 投与できるの?
- (33) a. ?何を、太郎が右手でダケ 握りつぶせるの?  
b. ??右手でダケ、太郎が 何を 握りつぶせるの?

介在効果テストにおいては、表層的なc統御関係以前に、そもそも、デダケとWh句が共起すると不自然になるようで、Wh句が文頭に出ているはずの、(32a)(33a)の許容度もあまり高くない。これは、デダケの解釈において、談話のフォーカス以外の要素が関わっているためである可能性もある。そのメカニズムにまで本稿では迫ることができないが、少なくとも、項位置のダケとは異なった振る舞いが確認でき、両者は区別して扱うべき点を抑えておくことにする。

以上、本節では、「断定限定」のデダケは、項位置のダケとは異なり、談話のフォーカスを担うと考えられる現象が見られることが分かった。「断定限定」のデダケは、沼田(1991, 2009)が「疑似節」を形成すると指摘しており、奥津(1985)は、「NP デダケ」が補文を形成

していると指摘している。このような特殊性を持つダケは、談話のフォーカスの議論においても、項位置のダケとは区別して分析すべきことを論じた。

#### 4 まとめと展望

以上、本稿では、とりたて詞ダケが直接談話のフォーカスとは関わりを持たないことを論じた。また、主語位置のダケが一見フォーカスを担うように見えるのは、ダケの特徴というよりはむしろ、目的語位置と主語位置の特徴の違いによることを指摘した。ただし、先行研究で補文構造をとると指摘されているような、「断定限定」のダケの場合はこの限りではなく、項位置のダケとは区別して扱うべきことを示した。

今後の課題としては、格助詞の後接がとりたて詞と談話のフォーカスについて与える影響について詳細に検討していくことが挙げられる。特にガ格という統語的位置は、久野(1973)に指摘があるように、総記解釈が必須になる場合があり、談話との関わりが強い位置であると考えられ、とりたて詞にどのような影響を与えているのか更なる検討が必要である。また、ダケは格助詞を伴わずに単体で用いることも可能であり(「太郎が リンゴダケ 食べた」)その場合との比較検討も必要である。

また、他のとりたて詞でも同様の振る舞いが見られるとは限らない。例えば、(2)で示したように、対比のハは分裂文の前提部分に出現不可能である。

(33) ??[教室で リンゴハ 食べたの]-は、太郎だ。(再掲)

今後、他のとりたて詞に関しても観察し、とりたて詞の個々の統語的性質と談話のフォーカスとの関わりをより精緻に分析していく必要があると思われる。

#### 参考文献

- 青柳宏 (2006)『日本語の助詞と機能範疇 南山大学学術叢書』ひつじ書房。
- 上山あゆみ (2007)「文の構造と判断論」長谷川信子 (編)『日本語の主文現象』113-144, ひつじ書房。
- 奥津敬一郎 (1985)「とりたて詞の分布と意味—「だけで」と「でだけ」—」『国文目白』52: 80-87, 日本女子大学。
- 久野暉 (1973)『日本文法研究』大修館書店。
- 久野暉、モネン多津子 (1983)『「ダケ・ノミ・バカリ・クライ」と格助詞の語順』久野暉『新日本文法研究』157-173, 大修館書店。
- 小林亜希子 (2009)「とりたて詞の極性とフォーカス解釈」『言語研究』136: 121-151, 日本語学会。
- 田川拓海、森芳樹、沼田善子、竹沢幸一 (2011)「とりたて詞と否定のスコープ関係に対する統

- 語論的アプローチ」『日本言語文化研究』第4輯,58-65, 大連理工大学.
- 沼田善子 (1991) 「とりたて詞文の二義性」『同志社女子大日本語日本文学』3, 同志社女子大学  
日本語日本文学会.
- 沼田善子 (2000) 「3 とりたて」金水敏・工藤真由美・沼田善子 (共著)『日本語の文法2 時・  
否定と取り立て』151-216, 岩波書店.
- 沼田善子 (2009) 『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房.
- 森田良行 (1972) 「「だけ・ばかり」の用法」『紀要』10, 早稲田大学語学教育研究所 (森田良行  
(1994)『動詞の意味論的文法研究』375-404, 明治書院 に採録)
- Heycock, Caroline (2008) JAPANESE –WA, –GA INFORMATION STRUCTURE. Shigeru Miyagawa,  
Mamoru Saito (eds.), *The Oxford handbook of Japanese linguistics*, 54-83. Oxford: Oxford  
university press.
- Hoji, Hajime (1985) *Logical form constraints and configurational structures in Japanese*, University of  
Washington Ph.D. dissertation.
- Kim, Shin-sook (2002) Intervention Effects are Focus Effects. Norio Akatsuka, Susan Strauss (eds.),  
*Japanese and Korean Linguistics* 10, 615-628. Stanford, CA: CSLI Publications.
- Miyagawa, Shigeru (2010) *Why Agree? Why Move?* Cambridge, MA: The MIT Press.
- Tomioka, Satoshi (2007) Intervention effects in focus. Shinichiro Ishihara (ed.), *ISIS* 9, 97-118.
- Tomioka, Satoshi (2015) (Non)-Exhaustivity of Dake ‘Only’. *Proceeding of LSJ* 150, 134-139.
- Rooth, Mats (1985) *Assosiation with focus*. University of Massachusetts Ph.D. dissertation.
- Rooth, Mats (1997) 10. Focus. Lappin Shalom, Chris Fox (eds.), *The Handbook of Contemporary  
Semantic Theory*, Blackwell Reference Online.
- Vallduví, Enric (1990) ONLY AND FOCUS. *Penn Review of Linguistics* 14, 143-156.
- Vallduví, Enric (1992) *The information component*. University of Pennsylvania Ph.D. dissertation.  
(井戸美里 筑波大学大学院、学術振興会特別研究員、i.misato59@gmail.com)

## Focus of *toritateshi dake* and discourse focus

IDO Misato

This article argues that *toritateshi dake* is independent from discourse focus. Previous studies treat *toritateshi* as a focus particle following Rooth's (1985) focus adverbs. However, the problem remains that these studies treated various *toritateshi* together while neglecting to pay attention to the particle's syntactic position. I will demonstrate that *toritateshi dake* does not possess any relation to discourse focus through three syntactic tests: (1) Can *dake* appear in presupposition of cleft sentences? (2) Can *dake* take narrow scope in negative sentences? (3) Can *dake* induce an intervention effect? Furthermore, I will show that the apparent relationship of *dake* to discourse focus can be explained by asymmetry of subject and object. Moreover, I will also show that instances of *dake* that appear following the adjunct's position should not be treated as the argument position's *dake*.